

＜書 評＞

砂原茂一（国立療養所東京病院）

上田 敏（東京大学）

対談

ある病気の運命：結核との闘いから何を学ぶか

横山 巖（七沢病院）

この書は、かつては人類の最大の天敵であった結核の栄枯盛衰を物語る壮大な叙事詩である。リハビリテーション医学の専門医の上田氏が、結核の第一人者であり、リハビリテーション医学にも御造詣の深い砂原先生から話を引き出す形で進められているが、上田氏は吾々が聞きたいと思う事を的確に質問して、砂原先生の蘊蓄の一部を引き出すことに成功しているので大変興味深い書となっている。

結核の歴史、障害者としての結核患者の実態、結核の予防、診断および治療の変遷、化学療法等々、結核

のすべてが語られている。思えば、ストレプトマイシンが発見されるまで、結核に対する治療は随分と廻り道をしたものである。砂原先生の言われるように、いわば、木を見て森を見なかったがゆえに、肺結核の治療のために、人工気胸、胸廓成形術等によって沢山の呼吸機能障害者がつくられてしまったのであった。評者も人工気胸によって呼吸機能を障害された1人であり、このような治療法を受けたことに対する無念の想いは消えないが、しかし「ストレプトマイシンが見つかるまで結核患者をほうっておくわけにはいかなかった」

という砂原先生の言にはうなずかざるをえない。

内部障害という概念が結核患者から始まり、障害者行政の中に組みこまれていった事も詳しく述べられている。

かつては人類に猛威をふるった結核は、今や人類によって殆ど制圧された状態にあるが、これは20世紀のビッグニュース・ベストテンの中におそらく入る出来事であろう。結核が優勢な時代から、亡びゆく時まで、いわば対結核戦の師団長、軍司令官として活躍された砂原先生の結核についての語りは、琵琶法師の語る平家物語よりもはるかに壮大な叙事詩といえよう。見直すことの重要性を教えられる書であり、啓発されるところの極めて大きい書である。医療に関心をもつすべての人に一読をおすすめしたい。

（B 6，頁 350，¥ 1,800，1984，
東京大学出版会 刊）